

大塚敬節
矢数道明

責任編集

世近漢方医学書集成

2

曲直瀬道三一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第Ⅰ期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 2 曲直瀬道三(一) 第Ⅰ期
全30巻

昭和五十四年五月二十三日 第一刷発行
昭和六十年七月二十五日 第三刷発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七一二四九四番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 株式会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01195-0 C3347

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫

一午門下生細而字自少至壯特早屆信以玄羽為持以
 東井為字也初雖以授普教之傳而廣而附攝讀之業
 故今也故復啓迪後人而令其居安而有不遠千里而為友
 宗師繼其席者輪茅鞋而音無父聲貴賤行門師
 有開明遠方來不亦樂乎德不孤必有隣之理也其後吳
 懈時因將黃名工將野負延圖予頌像以資俗傳不憚然也
 託猷談治術日新生涯手卷跋厥屢經孫博施書青
 勁徑投雲玉方影動塵

天正第五丁丑年臘日一澄史道三書于
 翠竹卷下



曲直瀬道三肖像

凡 例

- 一、本書第二卷「曲直瀬道三」には、『啓迪集』卷之一、卷之四までを収録した。
- 二、本書は全て影印版によつて収録したが、影印にあつては次のようにした。
- イ、新たに柱と頁数を付した。
- ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
- ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
- ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
- ホ、印刷不明な箇所は、阿知波五郎所蔵本により補正した。
- 一、底本は次の通りである。

啓迪集 版本（慶安二年版）八卷八冊（井上雅文所蔵）

- 一、解題は、矢数道明が執筆した。
- 一、巻頭の曲直瀬道三肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）によつた。

日本医学中興の祖 曲直瀬道三

矢 数 道 明

一 はじめに

東京都渋谷区の祥雲寺を訪れると、曲直瀬家（三代目より勅旨によって今大路家と改む）歴代の墓碑が左右に併立し、桃山時代より江戸時代を一貫して医をもつて宮廷と幕府に仕え、典薬の位につき、連綿として十二代に亘つて継承された名門の昔が偲ばれるのである。

いまの千代田区常盤橋御門より鎌倉河岸を望む埋立て地、呉服橋と一石橋の中間から和田倉門にかけて、江戸初期の道三堀があった。そこにかけられた道三橋のたもととは、往年医界に君臨して代々道三を襲名した曲直瀬家（二代以後）を初め、八人の御目見得医師の邸宅が並んでいたとい

う江戸名残りの地である。

史家は初代道三をもつて日本医学中興の祖とし、日本に実証的医学発達の端緒を拓いた実力者として高く評価している。

『日本の医学』⁽¹⁾はこの間の事情について巧みに説明を行なっているので、それを抜萃してみる。飛鳥時代以降、中国の文化に範をとったわが国では、はじめ隋唐医学の移入に全力を傾注し、ついで宋医学をとり入れ、さらに金元の医学を明を通じて知った。その間にあって、日本化の傾向はあったが、おしなべて中世の日本医学は中国医学追隨の域を脱することは出来なかった。伝統保守と秘伝思想の殻の中で、中世医学は長い時間的経過にもかかわらず、極めて遅々とした発達をみただけである。仏教を医療精神の根本とする限り、実証的精神が医学に導入されなかったことは当然の運命で、観念論的医学の範囲にあったことはいうまでもない。

すでに中国のあらゆる医学が伝えられていたわが国では、実情に即してどの学派の治療方針に従うかという問題を、医家自らが解決し実行しなければならなかった。これをみごとに成したげたのは、桃山時代の名医曲直瀬道三とその門下である。江戸幕府が樹立されるや、徳川家康は国民精神の基本を儒学、とくに朱子学においた。幕府百年の安泰を求めるには朱子学の思想が最も適していたからである。ここにおいて医療精神も根本から変化し、仏教的精神から儒教的精神に大転回した。

わが国における実証的医学のあけぼのは、曲直瀬道三に端を発する。彼によって仏教的医学観は全く影を没し、医療精神は儒教的道德観の上におかれ、中国医学を取捨して法則にこたわることなく、臨機応変に成方を運用すべきことが主張された。江戸幕府の文教政策は道三の主張をさらに前進させ、医学の自由な研究を助長させる結果となった。

元禄（一六八八—一七〇三）前後における復古思想の運動は、あたかも西洋のルネッサンスと同じ現象を呈している。近代医学の源泉は、近世初期に起こった学派の分立と、これから生じた古方派の展開に基づく断言するも大過ない。

この道三流医学は、田代三喜たしろさんきによって伝えられた李朱医学を日本的に発展させたが、その大成は初代道三と二代目玄朔げんさくの二人の業績であつた。

二 初代道三(1)(2)(3)(4)の略伝

初代曲直瀬道三（一五〇七—一五九四）の名は正盛まさもり、また正慶まさとしとも称した。字は一溪いっけいで、雖知苦すいぢく齋さいまたは蓋静翁こふせいおうと号し、院号は翠竹院すいちくいん、後に亨徳院こうとくいんといった。その祖先は宇多源姓佐々木氏より出で、堀部氏を名乗ること数代後の堀部左門親真を父とし、母は目賀多氏の女で、永正四年（一五〇七）九月十八日京都の柳原に生まれた。

一溪は生まれた翌日に父を失い、続いて母もこの世を去ったので、伯母と姉に育てられた。幼い頃より聡明利発で、十才のとき江州（今の滋賀県）守山の天光寺に入り、十三才のとき相国寺に移り、藏集軒というところに住んで喝食（かつじき、禪宗律宗の寺にて、成人後僧とするため養いおく侍童）となり、名を等皓（とうこう）と称した。この頃よく三体詩や蘇東坡（そとうば）、黄山谷（おうざんこく）の『山谷集』等の詩集を読んで、ことごとくこれを暗誦した。

二十二才のとき遊学の志を立て、肥後の人西友鷗と共に関東に遊び、下野（今の栃木県）の足利学校に入った。そこで正文伯に師事して經史（四書五經と歴史の書物）、諸子（韓非子、荀子など、古代支那で一家の学説を樹立した人）の学を勉強した。その頃明の留学より帰った田代三喜が導道練師と称して、初めて李朱の医法を関東に唱え、武・毛（今の埼玉県・栃木県・群馬県）を往来して治を施し、すこぶる名声があつた。ときは享祿四年（一五三二）十一月、一溪は初めて柳津（やなぎづ）というところで三喜と会い、その門に入って李朱医学を講究することとなつた。師事すること十二年、稽首尊礼、即ち素問及び微義（玉機微義）の論を学び、古来の諸論、諸方の可否を明らかにし、用藥百二十種の効能を伝受され、天文十四年（一五四五）京都に歸つた。翌年僧をやめ俗に還り、医術を專業に行なうこととした。

この年、將軍足利義輝に謁して大いにその寵遇をうけ、その病を治療して効があつたので、碾壺茶碗等の名器、富士茄子の茶入、蓼冷汁と名づけられた天目引両の釜を賜わつた。また細川晴



写真1 曲直瀬道三自賛 76才の像
(山本規矩三氏所藏/『本草』5号より)

元や三好修理、松永弾正など、多くの実力者や知名士が道三を厚く遇し、それらの人々の病を治してすこぶる効驗があつた。

道三は京都に学舎啓迪院を造つて門人弟子を養成することを自らの任務としたので、その名声はますます揚がり、道三の名を知らぬ人は殆んどないというほどであつた。また一方では医療をもつて門戸を張り、診療に従事すること三十余年に及んだ。そして従来わが国に察病弁治（病を明らかに診断して、証を弁別して治療を行なう）の全書というものが全くなかつたのを遺憾に思い、自らの治療經驗を基礎とし、古来の医書を参考にし、その精粹を選抜捨取して八巻に及ぶ編著を作り、天正二年（一五七四）に至つて完成した。これを『啓迪集』けいできしゅうと名づけ、その年の十一月十七日、正親町天皇の叡覧に供したところ、天皇は非常に嘉称されて、天龍寺の碩学僧周良策彦しやくりやうさくげんに命じてその大著述に序を書かせた。また「天下万民を救う医書の端に、苦の字は不可なり」と綸言りんげん（天皇のお言葉）あつて、雖知苦齋を改め翠竹の二字を下賜された。当時の人は榮譽この上ないこととしたという。

道三は晩年、号を亨徳院と改めた。豊臣、徳川二氏に重んぜられ、しばしば招かれたがお断りして、深く医に隠れて出仕しなかつた。文禄三年（一五九四）（一説には文禄四年とあるが三年が正しい）一月四日、病により年八十八で歿した。

初代道三の墓は京都十念寺に在る。碑面にはただ「一溪道三居士」の六字が刻まれているほか



写真2 『啓迪集』古写本（石原明氏所蔵）



写真3 『啓迪集』周良策彦題辞（石原明氏所蔵）



写真 4 初代曲直瀬道三墓
(京都・十念寺)

子の正純、正琳を妻わせて曲直瀬氏を名乗らせ、正純には亨徳院の号を譲り、翠竹院の称は嫡孫の守伯に授けた。

初代道三が、自ら「曲直瀬」の姓を称した由来は、玄朔の『東井御釈談』に出ている。即ち道三は日本の医学の流れを是正する理想を抱き、蘇東坡に「上流直にして清く、下流曲にして濁なり」とあることから、後世の曲にして渭（不浄）なる医の流れを、直にして清くせんと祈願より、曲直瀬と称したという。

りであるが、後陽成天皇は慶長十三年（一六〇八）四月に、正二位法印を贈られた。

道三は庭田氏の女を娶って一人の男の子を生んだ。名を守真といったが父に先立って逝た。そこで妹の子大刀之助を養嗣とし、守真の女即ち孫娘と結婚させた。これが即ち東井玄朔で二代目道三を嗣いだ。その後累代みな道三を称したのである。道三は別の孫娘に弟

永正四年（一五〇七） 一才

九月十八日 京都柳原に生まる。名は正慶（或は正盛）。父は堀部左門親真、母は目賀多氏。

永正十三年（一五一六） 十才

七月七日 江州守山天光寺に入り、般若心經、しぬりようじん首楞嚴經、法華經等の諸經を学ぶ。

永正十六年（一五一九） 十三才

八月十五日 相国寺に移り、藏集軒に寓して喝食侍童となり、名を等皓と称す。

享祿元年（一五二八） 二十二才

遠遊学を修むるの志あり。西友鷗と共に東行し、足利学校に入り、正文伯に師事して經史、諸

子の書を涉獵す。

享祿四年（一五三二） 二十五才

十一月十五日 会津の地、柳津にて田代三喜に会い、その門に入って李朱医学を講究す。

天文六年（一五三七） 三十一才

二月十九日 師田代三喜歿す。

天文十四年（一五四五） 三十九才

京都に帰る。

近国親問の学者の為に『授蒙聖功方』二卷を選す。

天文十五年（一五四六） 四十才

僧籍を脱して俗に還り、医を専らにす。

將軍足利義輝に謁し、寵遇をうけ、侍医となる。

学舎啓迪院を洛下に建て、徒を集めて経を講じ、後進を誘掖啓迪す。

天文十八年（一五四九） 四十三才

義輝及び佐々木義実^{すいみん}に推脈の意味を伝え、これ兵家の奥義に等しいという。

永禄九年（一五六六） 六十才

雲州白方に赴き、毛利元就の病を治す。

陣中学徒のために『雲陣夜話』一卷を著わす。

尼子伊予守義久、軍門を控えて道三を頼み一命安堵の口訴に及ぶ（『今大路家記抄』）。

永禄十年（一五六七） 六十一才

二月九日 毛利元就の請により、『雖知苦齋一溪道三言上目錄』を呈す（諍諫九ヶ条）。

和州多門久秀の懇望により、養生書一冊、仮名素女論一卷を授く。

『日用薬性能毒』一卷、『鍼灸集要』一卷を編纂す。

諸書の謹法を抜摘し、『須慎類五法二百八十二ヶ条』を纂述す。

永禄十一年（一五六八） 六十二才

『遐齡小児方』一卷を著わす。

元龜二年（一五七二） 六十五才

『弁証配劑医燈』三卷を著わす。

天正二年（一五七四） 六十八才

十一月十七日（金沢本は七日） 『啓迪集』八卷を著わす。これを正親町天皇に献じ、翠竹院の称号を賜わる。

天正三年（一五七五） 六十九才

十月十四日 織田信長来臨。蘭奢待らんじやたいの伽羅香木きゃらを賜わる（蘭奢待とは、東大寺正倉院御藏の黄熟

香に、聖武天皇の付けし名で、三字の中に順に東大寺三字義を含むものである）。

天正四年（一五七六） 七十才

しばしば徳川家康に拝謁す。

天正五年（一五七七） 七十一才

五月一日 師田代三喜の話を抄録し、『老師雜話記』と称す。

『診脈口伝集』一卷、『捷徑弁治集』一卷を著わす。

天正七年（一五七九） 七十三才

鍼灸の妄繆をなからしむる為、『禁灸穴解』『禁針穴解』を編作し、併せて『仰伏同身寸法』